

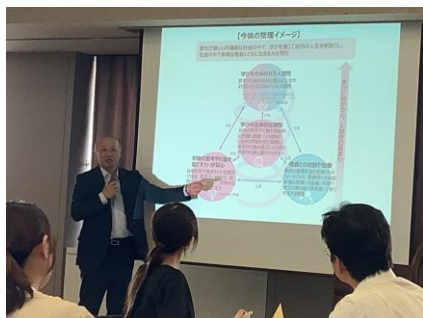
最上の子どもたちのために
未来へ

紡ぐ

- ◆ 最上教育事務所指導課通信
- ◆ 令和8年8月21日
- ◆ 最上教育事務所指導課
- ◆ 第 4 号

子どもの育ちと学びをつなぐ研修会 6月16日(火)

幼保小中の連携推進を目指し、「子どもの育ちと学びをつなぐ研修会」を開催しました。山形大学の野口徹教授を講師に迎え、子どもの資質・能力を軸とした育ちや学びの捉え方について学ぶとともに、演習や協議を通して、多様な視点から子どもの姿を見取ることの大切さについて理解を深めました。



参加者の感想

- ・「10の姿」の見取りを実際に体験したことで、子どもの育ちを具体的に捉える視点を得ることができ、日常の実践に生かしていきたいと思いました。
- ・幼保小中が共通の視点で子どもの育ちや学びを捉え、主体的に学び続ける子どもを育むことの重要性を改めて認識することができました。
- ・子ども一人ひとりの探究的な学びを支えることの大切さや、架け橋プログラムによる円滑な接続の意義について理解を深めることができました。

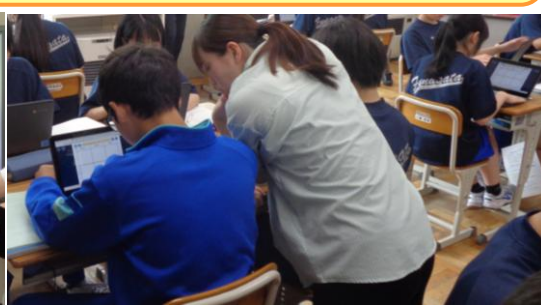
「教科担任マイスター制度」兼「確かな学力育成支援(M-TEP)C:チーム研修型」 中学校数学部会 公開授業研究会 6月23日(火)

今年度は、「教科担任マイスター制度」事業とタイアップしながら、「確かな学力育成支援(M-TEP)C:チーム研修型」を「小学校算数部会」、「中学校数学部会」の2部会で開催することとなりました。

中学校数学部会では、舟形中学校の遠藤早希先生、明倫学園の佐藤純先生、金山中学校の柿崎光希先生の3名がチームを編成し、授業づくり(単元・評価検討会、指導案検討会)に取り組みました。6月23日には舟形中学校を会場に授業研究会を実施し、山形大学大学院教育実践研究科の高山琢磨教授から「中学校数学科の教材開発(データの活用領域)」をテーマに講義していただきました。



- ・中学校統計は、計算問題の単元ではなく、**高山琢磨先生より**
根拠をもって判断する経験をつくる単元。
- ・箱ひげ図は「分析」の道具であり、問い・収集・判断・振り返りと切り離すと、作図練習で終わってしまう。
- ・つまずきは、箱ひげ図の限界を扱うチャンスと捉え、「箱ひげ図により、何ができて、何ができないか」を問いに変える。
- ・箱ひげ図で比較→疑問が生まれる→別の図で確認→判断を修正→根拠を再構成…この往還こそが統計的な見方・考え方を深める授業になる。



「教育相談関係研修会」兼「自立支援ネットワーク構築会議」7月7日（火）

本研修では、学びの多様化学校である上山市立西郷小・中学校（上山きらり学園）の西田浩校長先生を講師にお迎えし、同校で実践されている教育活動や、多様な人とのつながりを生かした支援について学びました。講話では、各学校でも取り入れることのできる実践について具体的にご紹介いただき、参加者にとって多くの示唆を得る機会となりました。さらに、教職員や教育委員会担当者、子どもふれあいサポーター、スクールソーシャルワークコーディネーター、民間支援団体の方々がグループ協議を行い、学校や地域でできる支援について意見交換しました。以下、参加者のリフレクションを紹介します。



参加者リフレクション

子どもたちが自己決定や自己選択を行うことや、個に応じた指導、人と人とのつながり、体験を大切にすることは、本校でも大切にしていることだと改めて感じました。今後も子どもたち一人ひとりに寄り添った支援を続けていきたいと思っています。

学びに向かうためには、安全で安心な風土の醸成が不可欠であることを改めて実感しました。学校だけでは対応できないこともあり、子どもや保護者が様々な人とつながりながら支え合えるよう、職種を超えた連携をさらに深めていきたいと思っています。

第1回最上地区中学校生徒会サミット 7月13日（月）

標記サミットがオンライン（Microsoft Teams）で開催されました。最上地区各中学校の生徒会活動の実践紹介・情報交換を通して、自治的な組織づくり、主体的な学校づくりを目指します。今回の生徒会サミットのテーマは、「生徒同士が絆を深め、安心して生活や学習ができる学校づくり～いじめの起こらない学校ってどんな学校？～」です。自校の自主的・主体的な取組みのより一層の充実に向けて、活発な意見交流が行われました。サミットの中で紹介された取組みの一部と参加者の感想を紹介します。



学校規模に応じた取組みや、自校にはなかった視点をすることで、非常に充実した時間となりました。また、共通の悩みを持つ他校と解決策を考えられたことで連帯感が生まれたと思います。（参加者）

他校の姿に刺激を受ける生徒が多く見られました。オンラインでの進行や挨拶にも習熟しており、継続的な開催による成長が感じられます。各校の実践が「安心できる学校づくり」というビジョンに繋がっていることが伝わり、自校の活動目的を振り返る良い契機となりました。（担当教職員）

参加された生徒の皆さんや先生方からは高い満足度が寄せられた一方で、「全体交流が発表の場にとどまっているのではないかな」という意見もありました。今後は、実践発表を資料の内容を説明するための時間ではなく、その後の協議を深めるための「きっかけづくり」と位置付け、資料の共有にとどまらない活発な協議を通して、参加校にとってより充実した学びの場となるようにしていきます。